

# ネット 新世紀 ヨーロッパ

## vol.1

### ヨーロッパが 世界のお手本?!

岡田 智博 (Tomohiro Okada)

1971年松本生まれ。九州芸術工科大学博士前期情報伝達専攻修了。コミュニケーションテクノロジーやニューメディアが持つ文化を通じた社会の変革に関心を持ち続け、この分野に関する調査やプロジェクトの立ち上げや執筆活動を国際的に行う。活動の一端は自身が経営する、クールステーツ・コミュニケーションズのサイトで見られる。

Jump coolstates.com

#### 国境を越えた経済・文化圏

インターネットのビジネスモデルの手本として日本人が参考しているのが、米国のシリコンバレー（サンフランシスコのあるベイエリア）やシリコンアレー（ニューヨーク）だというのは誰もが疑いようもない事実だと思う。だがインターネットを使った未来社会や文化の手本として彼らが参考している場所があるのは、日本では意外に知られていない。

それがヨーロッパだと言うと、否定する人も多いかもしれない。いち早くデジタル経済社会へと脱皮した米国や、活力溢れるアジアと違って、ヨーロッパと言えば「遅れている旧大陸」だの「取り残されている地域」だの先入観を持つ人が日本には多いからだ。

しかし、ヨーロッパはEUという国境の垣根を越えた巨大な経済・文化圏だということ忘れてはいけない。周知のとおり、国境を越えた共通の通貨を作ったり自由に通話ができる携帯電話を規格化したりしている、ある意味で最先端の社会の姿が生み出され続けている地域なのだ。もちろんインターネットの世界でも同じで、社会や文化の最先端のモデルがヨーロッパ各地で自然と生まれ、展開されている。

#### インターネットは『文化』の土台

1990年代初頭にインターネットが商用向けに開放されたとき、「Eコマースはビジネスチャンスだ!」ととらえるよりも、コミュニケーションツールとして「使いたい人たちが使える自由なメディアなんだ」と考える人がヨーロッパには多かった。もちろん、世界でもいち早く

電子マネーやEコマースの話で盛り上がったが（モンデックスも、倒産してしまったデジキャッシュもヨーロッパの企業だった!）、それよりも地域社会の中でインターネットをどう使っていくのかという議論とか実践とか、『文化』としての定着のほうが強かったというわけだ。

その取り組みは、「インターネットはどのメディアよりも自分たちにとって使えるメディア」という認識を高めて、生活や文化の血肉となりつつある。

#### 実践的な可能性を探る旅

ヨーロッパは7億も人が住む広大な大陸。アムステルダムのような先進的な地域だけでなく、たとえば紛争の真っ只中にあったサラエボでは、インターネットが政府の統制下にあったほかのメディアに代わって、コミュニケーションの回路として市民や難民たちに使われた。日本人が想像し得ないような状況にある地域を舞台に、インターネットの実際的な可能性が模索されているわけだ。

というわけでこの連載では、「インターネットのある社会」の姿を現実化させている、ヨーロッパのインターネットやデジタルカルチャーの先進地域を紹介していくつもりだ。その『社会』が誰の手によってどのように実現したのかを現地の人たちの取材によって明らかにしていきたい（少し偉そうに言ってしまうと、「IT革命」に行き詰まった人たちにちょっとしたヒントになればと思っている）。連載第1回の今月は次号以降で取り上げるヨーロッパの各地域についてまとめて紹介しておこう。ここでは『未来』がもう始まっているのだ。

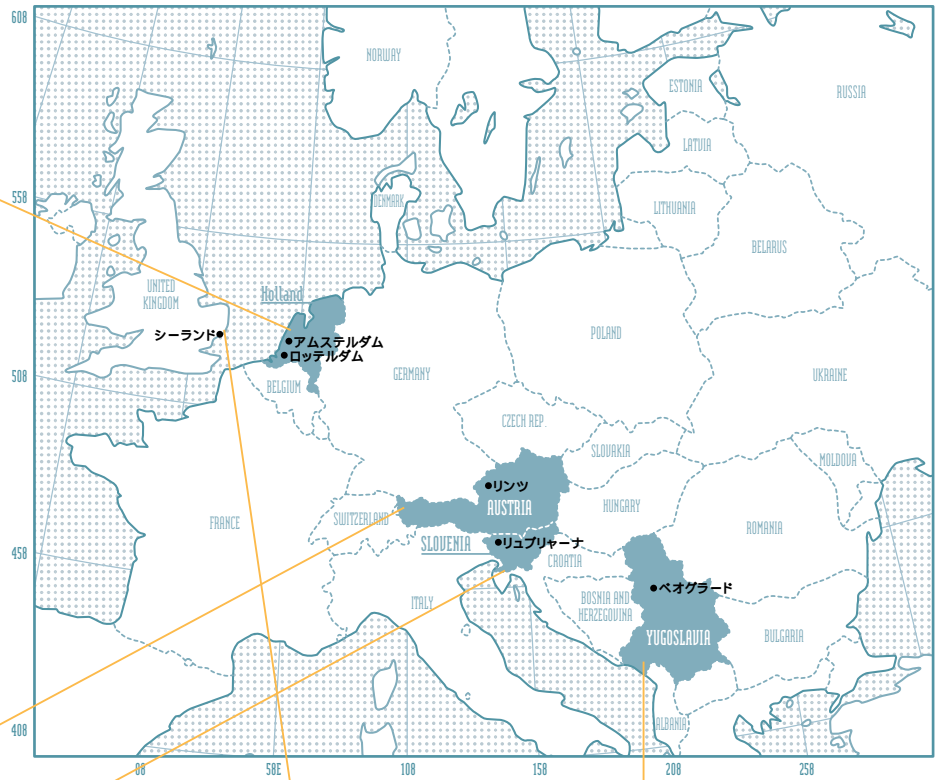
# これがヨーロッパネット社会の現実だ

## オランダ

Holland

この国最初のダイヤルアッププロバイダー（XS4ALL）はハッカーたちの手によって作られた。また、同時期にアムステルダムでは、インターネットをどのように使うかという議論が話題となって、ダイヤルアップ接続、POPアカウント、ウェブスペースなどをすべて無料で提供するNPOのコミュニティーサービス（デジタルスタッド）が生まれた。ダッチモデルとして注目されるオランダでは、このようにいつでも新しいメディアを社会の中の機能として使うための方法が考えられている。

（写真はアムステルダムに長年住み続ける住宅不法占拠者が作った「メディアセンター」）



## オーストリア

Austria

都市の日常生活の中にアートが入り込むこの国では、ITをアートとしてどのように取り入れていくのかという試みが繰り返されている。たとえば、最先端の電子芸術の祭典、アルス・エレクトロニカ（リンツ市）が20年以上も前に始まり、先端科学をアートという視点からとらえるユニークな場として定着している。たとえば昨年のアルス・エレクトロニカのテーマは「ネクストセックス」という、生活にかかわる先進的な内容をとり上げている。このような活動の積み重ねが、製鉄業に強く依存してきた斜陽の街をIT産業における優秀な人材を輩出する街へと変えている。

（写真は昨年のアルス・エレクトロニカのハイライト「精子レース」の様子）

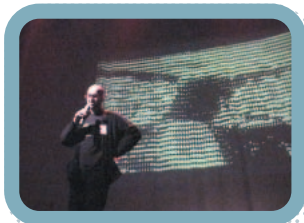


## スロベニア

Slovenia

ほんの四国ほどのサイズの小国は、日本をしのぐ東欧の中ではズバ抜けたインターネット普及率を誇っている。とりわけインターネットに関連した産業が強いわけでもないこの国がその地位にある背景には、インターネットを文化・アートとして積極的に利用していきたいというアーティストたちの活動があるからである。アーティスト自身の手によって作られたメディアラボ『リュドミラ』（リュブリアナ市）を中心に、希望する国民すべてに対してネットの無料接続やサーバーが提供されるなど、小国だからこそ実現できたといえる環境がある。

（写真はメディアアーティストのヴック・コジッチ）

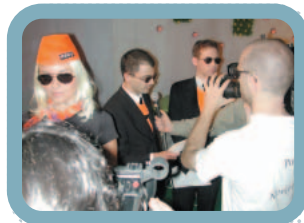


## シーランド

Sealand

英国ブリテン島の沖合のフォートレス（台場）に『シーランド公国』という、世界のどの国も承認していない「独立国」がある。英国の法廷がこの台場を、公海上にある設備として英国の統治が行き届かないものと判断したことで、シーランドはどの政府の支配もおよびない場所となっている。この「国」を舞台にいま、データを確実に秘密に保管できるオフショアのデータセンターが、ベンチャー企業『ハイブコー』の手によって生まれつつある。未来の話として片付けられてきたような、デジタルメディア社会のもう1つの顔がここに見え隠れる。

（写真はシーランドに本社を構えたアーティスト集団「etoy」の面々）



## ユーゴスラビア連邦

(セルビア) Yugoslavia

紛争によって他国から孤立する中、エクソダスを求める若者たちは支配者たちが思いもよらなかったメディアの使い方を生み出して駆使することで、外界と結びついた文化を辛抱強く保ち続けてきた。そんな様子を表しているのが、インターネット放送で国際社会にその存在を示すことで生き延びた、地元で人気の自主ラジオ放送局「B92」だ。手に入るありとあらゆるマシンを駆使してコンテンツを作り続けるアーティストたちを支えたメディアセンターREX（ベオグラード市）のように、極限状態がデジタルメディアによってユニークな文化を生み出す現象が起こっている。

（写真は空爆の痕がまだ残るベオグラード新都市の放送センタービル）





## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)